

出版ニュース
7/1997

団塊世代の男性像

中村 彰 ● 社会学

団塊世代がそろそろ五〇代を迎える時期がきた。これまで、話題に事欠かなかったこの世代の老年期はどのように予測することが可能なのだろうか。団塊世代の男性像をみきわめてみたい。

折しもバブルの崩壊という社会経済情勢の変動を経て、この世代の男性の多くは、中間管理職としてリストラ候補リストの対象にされた。企業優先の人生を生きて会社貢献をしてきたつもりが、会社から三行半をつきつけられた世代である。生命保険の倒産、大手証券・大手銀行の不祥事などが多発するなか、いま、自らの将来設計も安泰とはいえず、老後ビジョンの見直しを迫られている。

思えば、彼らは幼きころより、競争原理に翻弄され続けた世代である。小学校のすしづめ教室に始まり、高校・大学の受験競争があった。大学紛争に青春をぶつけ、好景気に救われて就職はそれなりに成果を得たものの、数少ない出世ポストを獲得する競争を強いられてきた。そうした日々の明け暮れの末、中年期にリストラの嵐に見まわられたのである。

一方、同世代の女たちは、仕事を持った者も専業主婦の道を選んだ者も、経済成長にともなうゆとりを享受できた間に、カルチャー教室に通い、地域でのネットワークの網を張り、みずからの生活基盤づくりに励んだ。その一方で、社会の矛盾に早

くから気づき女性解放運動に参加して、自治体施策のなかに、男女共同参画社会ビジョンをつくらしめるに至っている。

男たちは仕事に明け暮れるなかで、生活者としての知恵の蓄積を怠り、仕事以外のことにはからつきし応用の効かない人間

本は出さずに済ませたい

稲賀繁美 ● 比較文化史

出したい本など特にならない。というか本を出したいといった欲望がなえている。やっど単行書一冊出したきりで、こんなことを言う権利もあるまいが、流通に乗る本を出す病にはまだ罹りたくない。もう罹れぬ年齢かも知れぬが。もとより全集など逆立ちしても残せぬ凡才が、何冊かの本をこの世の置きみやげにしても、かえって世の迷惑。しょせんは自己満足の総和で地球環境のつじつまが合わないこ

に成り果てている。どうも団塊世代の男たちにとって、過酷な時代が訪れたようである。この難関をどう乗り越えることができるのだろうか。昨今のメンズ・ムーブメントの動きのなかに、そのヒントを探る著作を試みたい。

とは、もはや明白なのだから。せめて心の糧となる書を。次代の若い人たちの指針となれる本を。さもなければ大変な害悪をなすとして誰も読まず禁書として埋められる書を。でなければ本邦未訳の古典の翻訳にいそむか、日本語の世界にとどめておくのがおしい邦書を仏訳なり英訳なりして出版するか。輸出下手は今なお日本の出版界の大弱点だ。

国内では原稿のタレ流しは、いつかおさまるケハイがない。まあインター・ネットとホーム・ページの発達で、だれもが書くがだれも読まない、という健全な平衡が成立するかもしれないが。だが閉塞感はぬぐえない。

日本各地で毎年開催される美術展覧会のちらしの綴じ込み、を出したい。幸い全てはA4の大きさだ。一年分まとめて五〇〇頁にはなろうか。それなのにそれだけの情報を集計しているところはなにもない。同じ発想なら、大学の紀要など、全国でひとつに統一したらどうだろう。毎年厚さ五メートルの本。ミニコミ情報誌も同様に一誌にまとめる。それぞれの表紙の個性は残して。全ての書評もひとつの場所に集中する。それはもはや本の形態はとるまいが、人類滅亡後、そうした情報

の総体が電磁波に乗って地球を覆っていったら、やがてそれを見つめる宇宙人も現われるだろう。



書きたいテーマ・出したい本



日本語⇔マラウイ語説という、ウンベルト・エーコの自論がある。全ての言語は日本語に訳され、しかし日本語はめったに外国語に訳されないのだから、当たっている。そのくせ日本